



エツトとメヌエツトの間に、トリオが入る、といったような形式です。

このようにして、Aという小楽節とBという小楽節の組合わせには、いろいろありますし、また反復のし方や、応答のし方にも、ただ音程やリズムだけでなく、そのハーモニーや音の動き方などいろいろな要素が加わってきますと、Aの性格、Bの性格が複雑になり、なかなか簡単に、これはこの形式、というふうに決めつけられない場合も出てきます。

けれども、このお話をはじめた先ず最初に(五月)「チューリップ」の曲を、骨組みだけにして研究してみたことを思い出して下さい。ある曲を見た時に、その曲の、まあ、人間でいえば、その人の帽子やネクタイや、ハンドバッグとか靴などばかり、ジロジロ見ないで、その人そのものを、よく見てほしいということです。そうすれば、かなり複雑で、わからないと思われる曲の形式も、だんだんはつきりしてくるものです。

(注、譜例の番号は「幼稚園のための指導書」より。)

書 評

大西憲明編集 保育診断講座 1 幼児の個性をどうとらえるか

この講座は保育者にとつてたいへん興味深い題名をそれぞれ巻がもっている。第一巻は幼児の個性をどうとらえるか、という題で幼児の個人の心理学的特長について、保育の立場を考慮しつつ書かれている。第二巻は困った幼児にどうしてなったかという題で、第三巻は幼児は保育でどうかわったかという興味深い問題を扱っている。この第三巻がおそらく保育の現場教師がいちばん読みたいと思うものであるにちがいない。けれども、そこに到達するのに、まず幼児個人の、あるいは幼児集団の心理学的構造の基本を知らなければならぬ。間接的で迂遠なようであるが、結局はそれが近道なのである。しかしそのような個人の心理学的理解がそこ

だけでとどまってしまうならば、保育とどのように結びつくのかわからなくなってしまう。それは保育の実際という観点から見直され、統合されてゆかなければ生きた知識とならないであろう。この講座はそのようだと推察する。いま私は第一巻を拝見しただけであるが、この第一巻では幼児個人の心理学的問題がひと通り網羅されており、それぞれの問題が常識的平易に流れすぎることなく、しかもわかりやすく解説されている。幼児心理学の新しい知識を勉強するのには好適の書物であろう。巻末の参考書は親切に選択して載せてあるから、さらに進んで勉強しようとするのにも便利にできている。

これから第二巻、第三巻と保育の直接の問題に入るにつれて、それをどのようにとり扱ってゆかれるだろうかとのしみ

黎明書房 昭34 B 6
三一四頁 三八〇円